



1981.11.2 猿払川

鍛 治 英 介

湿原の支配者

イトウ(鮭)

陽はすでに落ち、華やかな色彩の饗宴も終りに近づいて、わずかに水面が鈍い残照をとどめ、万物迫りくる夕闇の中に没せんとしていた。終日藪の中で片言の歌をうたったウグイスも、けたたましいデイスブレイを繰り返したオオジシギも、日中活動する多くの動物達が、いまや安息の深い眠りにつく。

その時だった。数m先の声の根元で何かが動いたのは。目を凝らすとネズミ。ヤチネズミだ。小さい仔を連れている。親ネズミは用心深くあたりを窺っていたが、そろそろと水に入り、対岸目指して泳ぎ出した。仔ネズミ達も後へ続く。親を先頭に仔が四匹、一直線になって川を渡る。川幅およそ3m。そのちょうど中間地点を過ぎた時、不意に最後尾の一匹が水中に姿を消した。続いて次々と。そして水しぶきの中で、必死に逃げ廻る親ネズミまでが。イトウだ。イトウに襲われたのだ。

ネズミ全部を腹中に収めたイトウは、なおもしばらく水面に背鰭を立てて近くを泳ぎ廻っていたが、やがて暗い水底へゆっくりと沈んで行った。静寂が戻り、気がつく、夕闇はいよいよ深く湿原を包んでいた。この舞台は北海道の北端サロベツ原野。一九七八年六月に目撃した一幕のドラマだ。

プロフィール

あらゆる釣り人達から畏敬と憧れをこめて「幻の魚」と呼ばれるイトウ。その金環にふちどられて不気味に底光りする眼は、死した後もなお爛々と燃えて、釣り人を見上げるがごとく。大蛇のそれを思わせる扁平な頭部と深く裂けた大きい口。強大な顎には研ぎすまされた刃物のような歯が、切先を咽奥へ向けて立ち並び、さらに口中上顎部にもう一列の歯が並んで、一度くわえた獲物は絶対に逃がさず、確実に腹中へ送り込む。その食性は猛猛無比、魚類、蛙、山椒魚、などはいうまでもなく、蛇や鼠、水鳥、狐までも襲って食う。銀白色に輝く体表面は全身に暗褐色の小紋を散りばめ、下半身にうつつすらと朱をまとう。最大身長は2mを超えると言われ、まさに猛獣の豹を彷彿させる北方圏魚族の王者。これがその素顔だ。

分布と生態

かつては青森県小川原沼にも棲息したと伝えられるが、現在のわが国では北

海道、千島だけに残存し、その世界的分布を見て、

1、北海道、千島、樺太から沿海州。

2、アムール河水系および北氷洋へ注ぐシベリアの河川。

3、鴨緑江、長津江、赴戦江など朝鮮半島基部の河川。

4、揚子江上流。

5、ゲニューブ河。

の五カ所に限って、それぞれ一種ずつが独立して棲息するのみであり、動物学上極めて特異な現象を示している。

古くはユーラシア大陸北部の全域に広く棲息していたものが、その後の環境変化によって隔離され、分化したものであらうと考えられている。だがその過程の詳細は、まだ正確に判らない。

また、北海道、千島に棲息するものと、沿海州のものを別種とする説、揚子江に棲むものはイトウではないとする説、朝鮮半島基部のものは別種と認めがたいとの説などもあり、今後の研究成果が大いに待たれる。

さらにイトウの生態については、研究者諸賢の労苦に深い敬意を表しながらも、いまだ多くの謎に包まれているといつて過言ではなく、極めて断片的な情報伝えられるだけだ。

道東の河川におけるイトウの産卵は三月から五月、特に四月が最盛期。これが五月、六月頃に孵化。河川で稚魚が見られるのは七月頃だ。彼らは秋の終りまでに四〜五cmに成長し、その年の冬は湧水の出る温かい場所に集まって越冬する。翌年の春先には七〜八cmまでになる。幼魚時代の食餌はもっぱらトビゲラやカワゲラなど水棲昆虫の幼虫に頼っているが、十四、五cmになると小魚も捕食し、さらに三〇cm以上に成長すると完全に肉食となつて、ドジョウ、スナヤツメ、トゲウオ、ワカサギ、ウグイなどの魚類や、カエル、サンショウウオなどの小動物を捕食するようになる。

幼魚時代、彼らは群を作って生活するが、二五〜三〇cm以上に大きくなると、単独行動に移り、一尾ずつがそれぞれ独自のテリトリーを確立する。こうなると日中活発に泳ぎ廻って餌を執ることはなくなり、深くえぐれた暗い水底の沈

木の蔭などに隠れひそんで、そこへ小魚や小動物が近づくと猛然と襲いかかり、一口に呑み込んでしまう。

イトウは孵化後一〜二年に銀毛現象を起こすことから、降海する本能そのものは失われていないと考えられるが、鮭鱒のように全部または大部分が降海するわけではなく、ごく一部が海へ降るだけで、さらに降海後も遠く外洋へ出て回遊せず、アメマスやウグイのように、極めて沿岸に近い水域が行動範囲だらうと推定されている。

イトウの生活年令は、サケ科の魚達の中では際立って長いものだが、その成長度はとりわけて悪い。鱒の年輪を測定して、体長一、二mで十五年余り、五〇〜八〇cmの魚体で九〜十二年、二〇〜三〇cmでも満四歳から五歳だと言ふ。北海道開拓時代には、二m以上の大型魚が普通に見られたと伝えられるイトウも、最近では一mを超す魚体と出会うのは珍しいことになつてしまった。

悲惨な歴史

振り返れば、イトウの歴史はいつも悲しい。華やかなスポットライトを浴び、国家事業として強力に推進されている鮭鱒増殖事業の陰にかくれて、その研究がなおざりにされて来たばかりか、本来イトウの保護者たるべき魚類学者や水産行政担当者までが、鮭鱒増殖の害魚と言う側面だけを取りあげて、積極的にイトウの駆除を奨励して来たのだ。

近年、鮭鱒増殖河川のみならず、わずかに残された他の水系においても、北海道固有の魚達、イトウ、アメマス、オシヨロコマなどが急激に減少して来た最大の原因は、鮭鱒増殖事業という錦の御旗を免罪符として、他の魚類を切捨御免で罷り通した、この近視眼的水産行政に存在することを改めて明確に指摘しておかなければならない。

幸い鮭に関してはここ数年来、孵化場関係者の日夜を分かたぬ真摯な努力が実を結び、回帰率、回帰尾数共に飛躍的進歩をとげて、将来安定した魚獲量が期待できるようになった。いまこそ、これまで陽の当らなかつた諸問題を掘り起こし、再検討を加えるべき絶好の機会ではなからうか。

今日もなお、河川改修やダム建設、林道開削等による棲息環境の破壊、また工場廃液や大量塵芥の不法投棄、牧場の動物尿のたれ流しによる水質汚染、心ない人々による幼魚の乱獲、小河川に遡上する産卵期親魚の捕獲、等々、数えあげればきりが無いほど多くの要因によって、イトウの生存はますます危機に追いやられている。

最近、尻別川、十勝川で、その数は非常に少ないのだが、1m前後の大型イトウが釣れている。それはマスコミでも楽しいニュースとして報道され、一見イトウ資源が回復して来たかのように受け取られがちだが事實は、両河川共魚影決して濃いとは言えず、釣れる確率も極めて少ない。しかし釣れる魚はほとんどが大型なのだ。

これはちょうどわが国の人口問題と同じく、そこに棲息するイトウの年令構成は、若令魚が広い底辺を占める正常なピラミッド型を示さず、老令魚だけの頭でっかちになっているのではあるまいか。

この両河川には、ダムの設置や河川改修の進行状況等から見ても類似点が多い。そこにはもはや産卵に適した自然が失われ、ために多数の若令魚を見ることもなく、残存している老令魚だけが時折釣れるということであれば、種の滅亡は目前に迫っている。

明日では遅い。いま、この時期に抜本的保護対策が必要なのだ。それはダム建設や河川改修工事などの見直しから始めなければならず、決して単なる遊漁禁止でお茶を濁すようなことであってはならない。

チライとオピラメ

アイヌ文化の研究で著名な知里真志保氏は、遺稿「分類アイヌ語辞典、動物篇」の中で次のように記述している。「美幌ではイトウに三種を区別する。トシリ、チライ、オピライベ。この三種はちよつと見ただけでは区別が分からぬ。しかし口の横つちよの具合がどこか異なっている。」

また、更科源蔵氏は、その著書「コタン生物記」に、「動物学上ではイトウであるというが、コタンの人たちはイトウとは絶対にちがうという。イトウの

頭頂は三角形にとがっているが、オピラメは平らであり、イトウの肉は脂肪がなく白くてまずいが、オピラメは脂肪が多く肉が赤くておいしい。筆者も何度か食べたことがあるが、たしかにその通りであるので、これは産卵期による差異かとも思ったが、産卵期でも産卵後でも両者はちがいが、オピラメは産卵後でも肉が赤く油があるという。」と、イトウ（チライ）とオピラメの差異を説明している。

現在わが国に棲息するイトウは、学問上で一種類とされている。しかし、前述の通り古くアイヌの人々はそれを区別し、また今日釣りの仲間達が集めたデーターによれば、秋に産卵するイトウと春に産卵するイトウの二種類があるように推測できる。これらがチライやオピラメとどう結びつくのか、あるいは全く無関係なのか、非常に興味深い。

イトウ釣り

押さえ込むような鈍く重いアタリに、竿先を大きくあおって確実な鈎合わせを試みる。とたんにロッドが半円を描き、リールは悲鳴をあげてラインを吐き出す。ヒットだ。でかいぞ。強烈なショックが釣り人の身体を貫き、血潮が逆流する。ブレイキの効いたラインを引張って、イトウは上流へ進む。物凄い力だ。どんどん遠くへ伸びて行き、スプールに残るラインは少ない。止まれ、止まってくれ。念じつつ、釣り人はロッドを反して必死に止める。イトウは反転し、今度は下流へ向かう。いまだ、巻き込め。流れに乗せて数m手前までは、比較的簡単に寄せる。だが人影に気付いたイトウは、再び爆発的なフアイトを見せて遠くへ走る。あわてるな。ラインを出せ。双方秘術を尽して幾度か攻め合い。イトウは流れの中ほどで動かなくなる。彼の荒々しい息づかいが、すべての鱗を抜けて水底にへばりつき、頭を振って鈎を外そうとしている動作の一つ一つが、タイトラインを伝わって釣り人の手に鮮明に感じられる。あせるな。釣り人は堪える。息詰まる長い時間をじつと堪える。ロッドを握る腕が硬直して痛みさえ覚える。イトウはようやく動き出し、いきなり水面に跳び出す。竿先を下げよ、浮かせるな。いたずらに浮かせては十中八九仕損じる。ラインを

巻け、引き寄せろ。彼にはすでに当初の力無く、身をくねらせながら寄ってくる。だがなんと重い奴だ。最後まで油断は禁物。目前まで近寄ったイトウは突然、白い腹を見せてでんぐりがえり、尾鰭で激しくラインを叩き、身体に巻きつけて外さんと、あくまでも執拗に抵抗する。それはまさに大蛇、爬虫類の姿だ。

イトウ釣りは、ドジョウウびきといわれる餌釣りとはルアーフィッシングの二つに大別される。ドジョウウびきは、地方によって多少のバリエーションはあるものの、普通は二本鈎、障害物の多い釣り場では一本鈎仕掛が原則だ。日中は、ドジョウウの四〇cmほど手前に適当な錘りを付けて川底を管めるようにひく。朝夕は錘りを付けないか、付けても極少型。夜は完全に錘りはずし、ドジョウウを浮かせて水面近くをひく。

ルアーフィッシングでは、一般にスプーンとプラグが主体。時にはプラスチックワームやスピナーも有効。いずれにしても、ある程度重量があつて遠投できるもの、動きの派手なものが効果的。水底をゆっくり這わせるようにひく。朝夕のマズメ時にはフローティングプラグも面白く、特に夜釣りには絶対の必需品だ。ルアーを追うイトウは多く足もとでヒットする。このため目前まで来たルアーをそのまま引き上げず、もう一度横へひき直すことが必要だ。最後まで決して油断できない。

フライフィッシングでは、マラプーやマドラミノーなどのストリーマー、モントナタイプ的大型ニンフが実績を誇る。通常はシンカーを使用するが、障害物の多い釣り場ではレットコアラインを適量フライラインとリーダーの間に接続する。シンキングラインとその専用リーダーの単なる組み合わせより早く沈めて、水底近くをひくことが要求されるからだ。

また、ドライフライも軽視できない。驚くべきは、完全な肉食と考えられている大型イトウも、カーデイスやブルーダグンなどの比較的小さいドライフライにかかると。

イトウ釣りのベストシーズンは、冷めたい霧が降り続く晩秋から河川湖沼が深い氷雪に閉ざされるまで。それは、水温の低下と共にウグイなどの小魚が移

動して餌が不足すること、また、それまで自己のテリトリーを堅持して河川全体に広く散在したイトウが深い越冬場所に集結するため、容易に狙い場を絞れることに由因する。そして翌年、春早く河川の表面を覆っていた厚い氷が割れて、水面が顔をのぞかせた直後だ。特に春先には、例年決まって記録的な大物が釣れる。身長一mを超え、体重十五kg以上の巨大なイトウだ。

このため、イトウに取り憑かれた男達は、春先に少し暖かい日和が続くと、いつ氷が落ちて川面が開くか、そればかり気になって仕事に手がつかず、そわそわと数日を過し、ついには我慢できなくなつて岸辺の猫柳の芽がまだ固い蕾のうちから、純白の雪原に点々と足跡を残して、川ぶちを終日さまよい歩くのだ。

(ナチュラリスト)

参考文献

- (1) 知里真志保著作集、分類アイヌ語辞典、動物編、平凡社
- (2) コタン生物記、更科源蔵、更科 光著、法政大学出版社
- (3) 北海道東北部におけるイトウ (Hucko perry) の年令と生長 山代昭三著 日本水産学会誌
- (4) 釧路のさかなと漁業 桜井基博他共著 釧路市
- (5) 原色淡水魚類検索図鑑 中村守純著 北陸館